

放送大学附属図書館蔵『通鑑紀事本末』巻十三について

小 二 田 章¹⁾

A Bibliographical Research about *Tongjian Jishi Benmo vol.13* Collected by The Open University of Japan Library

Akira KONITA

要 旨

放送大学附属図書館の所蔵する漢籍『通鑑紀事本末』（巻十三のみ、2冊）について、書誌学的検討を行いその価値を確認し紹介すると共に、あまり研究のない同書籍の版本研究の補足を試みた。四部叢刊本・静嘉堂文庫蔵本と校勘し、同書籍は南宋宝祐年間刻の明清期修訂・後印本であり、印刷者の精度がそこまで高くない本と推定した。蔵書印から同書籍は民国期の政治家・高凌霨の旧蔵であると考え、国立台湾大学図書館のコレクション調査と併せて検討した。同書籍の存在は研究上の貢献可能性・国立台湾大学図書館との交流の可能性・博物館図書館教育としての版本学古籍学の教育可能性という新たな可能性をもたらすものである。

ABSTRACT

A bibliographical research of the Chinese text *Tongjian Jishi Benmo* held by the Open University of Japan Library (only Volume 13, 2 books) was conducted to confirm and introduce its value. Additionally, an attempt was made to supplement the edition studies of this book, which has received little research attention. By comparing it with the Sibū Congkan edition and the Seikado Bunko Collection's copy, it was determined that this copy is a Ming-Qing revised and later printed edition of a printing originally made during the Baoyou era of the Southern Song dynasty. It is presumed to be a copy where the printer's precision was not particularly high. Based on the bookplate, it is thought to have been formerly owned by Gao Lingwei, a politician of the Republic of China period. This was examined in conjunction with a survey of the National Taiwan University Library's collection. The existence of this book presents new possibilities: potential contributions to research, opportunities for exchange with the National Taiwan University Library, and the potential for teaching old book studies and classical texts as part of museum and library education.

はじめに

題名の書籍の存在を知ったのは、図書館の貴重書紹介の番組企画を受けたことだった¹⁾。図書館から貴重書リストをいただいて、どれにしようかと眺めていたとき、この書籍が目にとまった。大学の性質と成立年代、また図書館の収蔵形態により、私の研究対象である中

国古籍（漢籍）はほとんどないことは予想していたが、この書籍はほぼ唯一の漢籍であった²⁾。さっそく、閲覧予約をかけて、あまり期待せずに図書館に行き、館長室にて閲覧した。大本の保存箱をあけると、割と綺麗な帙（写真1）があり、それをあけたところに、書籍の表紙と説明を書いた展示用？のカード（写真2）があり、「宋版」と記載される…宋版！？正直に驚いた。

¹⁾ 放送大学准教授（「人間と文化」コース）

¹⁾ 2024年6月17日のメールにて、告知番組「キャンパスガイド」内の「貴重書紹介」にて何か紹介してほしいというお話をいただいた。その後、制作部の森園有里さん（当時）と計画を相談したが、番組の兼ね合いなどもあって企画は流れてしまった。

²⁾ 最初の閲覧は、該書と中国へのキリスト教布教のために漢訳され上海で印刷された『旧約・新約聖書』（193/B41/1-4、全四冊、上海墨海書館、1855）であり、この2種が附属図書館の漢籍であった。

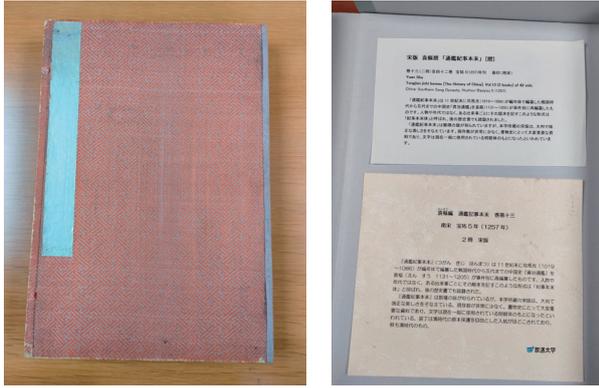


写真1 (左) と写真2 (右)³

宋版、即ち中国の宋代に印刷にて制作された書籍は、中国の印刷書籍史上のオリジンにして後世のモデル、貴重書中の「宝」とされるものである⁴。中国と漢字文化圏ではそれを所有することが図書館の格を定めるとされ、今でもオークション上で図書館たちがしのぎを削っている。もともと宋代史から研究キャリアを始めた筆者にとって、宋版は原史料そのものであるが、「宝」ゆえに原本にて閲覧できないことが多く、原本を閲覧したのは人生で三度目である⁵。

この書籍の由来・来歴を確認しようと思い、図書館の方々⁶、人間と文化コースの先生方、さらには以前の図書館長にも尋ねてみたが、誰もその存在を知らず認識していないことがわかった。

そこで、この蔵書の価値を確認し紹介すると共に、改めてあまり研究のない『通鑑紀事本末』版本研究の一端の助けとしたい。

1. 『通鑑紀事本末』版本来歴

版本の校勘、推定を始める前に、前提となる該書の歴史的過程と刊行流传を述べる。

北宋にて王朝の公認支援のもと編まれた司馬光『資治通鑑』は、中国における歴史書編纂の歴史において画期的な書物であった。要因を簡単に述べると、歴代王朝が個別に行ってきた歴史編纂とその解釈を規準だてて再解釈した初めての「解釈された歴史」であり、歴史を編纂することではなく、歴史とその解釈を政治を執り行う皇帝と士人たちに読ませて参照させること

を目的にした「読ませる歴史」であり、そのために当時の最新技術である印刷技術により印刷・刊行され、後の複製再刊を通じて人々に浸透した「普及する歴史」であったことである。科举制度を通じて政治参加を全国に募り国家を統合した宋代以降の王朝において、政治参加を図る士人たちは歴史を学び常識として（テスト合格を含めた）自分たちの立場と立ち位置を定める必要があった。しかし、彼らの前に立ちはだかっただのは、宋以前、彼らの王朝の感覚でいえば、周から唐まで、約2000年の歴史事象とそれを結びつける解釈を読み学び覚え理解することの「困難」であった。そのため、『資治通鑑』はかなり早期から、抜粋や再構築など、読みやすく学びやすくする試みがなされていった。

南宋という、華北を非漢族の女真に奪われて「中華（世界の文明の中心）」足り得なくなった時代において、自分たちに伝統の後継たる資格と根拠となる過程を示す歴史の重要性は増大した。「儒」の新たな形態として、伝統とその知に本質・真理に至る道を見出す「道学」が成立したが、彼らもまた歴史を根拠にすべく、自分たちの歴史解釈を打ち出した。代表的「道学」の指導者であった朱熹は、『資治通鑑綱目』という自らの解釈を付した『資治通鑑』解釈書を編んだ⁷。朱子学の歴史認識を説く中心的テキストとして、朱子学が国学になった後の明代には学校に常備される基礎教科書の扱いを受けるなど、人々に浸透・流行した。しかし、それでも大部かつ難解に過ぎて、人々の理解の苦闘は続いた。

その『資治通鑑綱目』とほぼ同時期（淳熙元年1174）に、嚴州（現・浙江省建徳市）の州学教授・袁樞が、「歴史の因果関係」に絞った形の通鑑解釈本を編んだ。これが『通鑑紀事本末』の成立である。この袁樞の解釈書は、皇帝・孝宗が読んで感激し彼を抜擢するなど評判高く、友人など読者を通じて広がっていった⁸が、一介の学者で当時官位も高くなかった彼の出版部数と拡散力は限定的であった。彼の初版刊行から約80年後、道学者でありかつ11年に渡り首都臨安の知事をつとめるなど政界の実力者であった趙與箴(?-1264)が、宝祐五年(1257)に、故郷の湖州にて費用をふんだんに投入した⁹大字本（体裁の大きい豪華本）として再刊した。この趙與箴の作った宝祐大字本が現存する宋版の大半であり、以後この本を軸に後世の版本が形成されていく。

モンゴル王朝・元において、民族のアイデンティティ

³ 以降、キャプションのない写真は全て放送大学附属図書館蔵『通鑑紀事本末』とその附属物の写真（筆者撮影）である。

⁴ 近い例で言えば、テレビ東京「開運！なんでも鑑定団」（2025年4月1日放映）に、千葉県銚子市の圓福寺の住職が宋版『韓昌黎集』9冊にて出演し、3億円の鑑定額を得ている。https://www.tv-tokyo.co.jp/kantei/kaiun_db/otakara/20250401/06.html

⁵ 最初は慶應義塾大学の斯道文庫の授業にて書庫内にて閲覧したこと（書名など記録せず）、二回目は2009年の秋に、香港大学附属図書館にて『范文正公集』を閲覧したことである

⁶ 図書館の該書の購入時帳簿によると、平成十五年（2003）3月26日付で購入決裁され、雄松堂書店より購入している。なお、購入時の書店の説明書が帳簿に付されており、写真2の展示用説明のものになっている（付録説明参照）

⁷ 『資治通鑑綱目』については、中砂明德「教科書の埃をはたくー『資治通鑑綱目』再考」（同『中国近世の福建人』、名古屋大学出版会、2012）を参照。

⁸ 朱熹も刊行の翌年に入手して読み、跋文を作成している。「跋通鑑紀事本末」（『晦庵集』巻八十一「跋」）を参照。

⁹ 序文にて、知臨安府退任後の4年間の故郷生活中に該書を知り、旧版は字が小さく間違いが多いので、私錢を投じて老眼にも見やすい本を刊行した旨を述べているが、宝祐五年は充電を終えて知平江府（現：蘇州）兼淮浙發運使という重職についていた年代であり、全部私的印刷とは思えない。

を求めた漢族社会に朱子学が浸透し、元朝も漢族の代表的な「儒」として朱子学を基準とした科挙を「再開」した。そして、前述した明代の「国学」化により、該書も「定番の参考書」として人々に定着した。彼らは、宋代に印刷された本を手本に自分たちの読む書籍を印刷し浸透させた。そして、明代において、自分たちの文化の原点としての宋版珍重、コレクションが開始された。コレクションの記録とアピールを兼ねた「蔵書記」が作られ、また時代を越えて損壊劣化した宋版の状態回復を図る修訂が蔵書家たちの手で開始された。この作業の一環として、精巧な宋版の複製を作ることも行われた。

最後の王朝・清に入り、皇帝を含めた各地大蔵書家たちが「中国の宝」である宋版を争って求め、「発見」された本を収蔵し蔵書記上で「鑑定」結果を述べたが、王朝も含めてそのコレクションは永続するものではなく、散逸と新たな蔵書家による収蔵という展開を繰り返した。近代に入り、20世紀前半民国期にあって、動乱のもと、より激しい散逸が発生し、版本の失踪・海外への流出、そして消滅という事態が起きた。この混乱に抵抗し、知的財産として古籍を残そうとする人々が、それらを近代印刷技術でコピーまたは再刊して人々に提供する「叢書ブーム」が発生した。そのうち、蔵書家・張元済の主導する上海商務印書館により『四部叢刊』が刊行された¹⁰。これは清朝の「皇帝のための世界叢書」『四庫全書』を民間の立場で後継するものであり、そのコンテンツたちは張元済の蔵書（涵芬楼・涉園）をベースに構築された。『通鑑紀事本末』もまた『四部叢刊』の一角として、涵芬楼蔵の宋版大字本を影印して刊行された。

以上が『通鑑紀事本末』の版本の歴史的過程である。特に注目すべきは、南宋大字本が『通鑑紀事本末』の基準点であって、以後の諸本に影響を与えてきたことである。

2. 附属図書館蔵本とその校勘

まず、対象の基礎的な版本内容について説明を行う。

『通鑑紀事本末』（目録¹¹及び巻頭題）

2冊、巻十三のみ。23.5 × 35.7の大本（写真3）。

四綴、包角あり。表紙藍色、題などなし。

游紙2、巻十三のみのため序跋などなし。

上記の装丁は原本入補（全てに入紙）のもの、

原帖は23.5 × 32.0。（写真4）

本文界郭は左右双辺、11行19字。

字体は顔体、南宋臨安や江西の字体に似る。

版心は上に刻字数、中に単黒魚尾、書名、巻数、

頁数、下に刻工名。

第一冊巻頭に朱方印「曾藏章武高氏水架庵」「澤翁鑑賞」（写真5）、第二冊巻頭に朱方印「澤翁長寿」（写真6）、両巻末に朱方印「退園珍蔵」（写真7）。

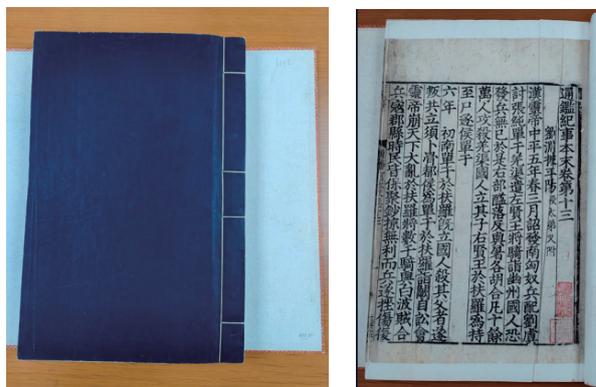


写真3 (左) と写真4 (右)

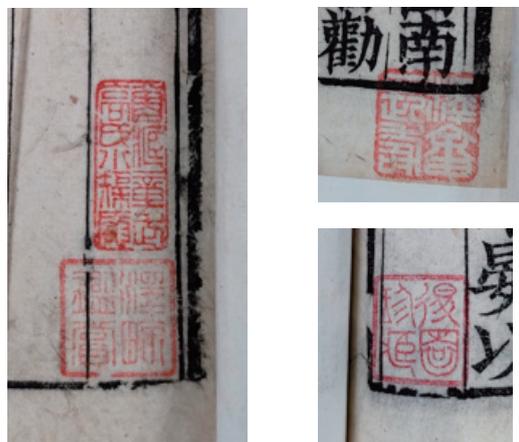


写真5 (左) と写真6 (右上)・写真7 (右下)

この版本を、四部叢刊本（涵芬楼宋版大字本の影印¹²）・静嘉堂文庫蔵本（宋刻明清通修本¹³）と校勘した。紙幅の都合、校勘結果の重要点と特徴に絞って以下述べる。

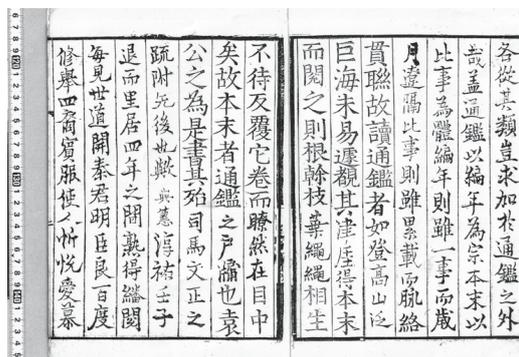


写真8 静嘉堂文庫蔵本 巻首趙與憲序

¹⁰ 蘇精『近代蔵書三十家（増訂本）』（北京：中華書局、2009）の「張元済涉園」を参照。

¹¹ 目録には次のように書いてある。「082/E56/13-1 貴重書室 通鑑紀事本末、巻第13 / 袁樞編 ; [1], [2]. -- [出版者不明], 1--」。

¹² 『四部叢刊』序録によると、この涵芬楼宋版大字本は「元明の通修本に非ず」とし、欠巻も「京師図書館蔵の宋印本で補った」と述べている。

¹³ 以降、静嘉堂文庫蔵本（静嘉堂本）と表記される写真は、許諾をうけた同本の複写である。この状態が明らかなのは、趙與憲の序文第2頁である（写真8）。印刻と複数の抄補が混ざり合っている。

まず、説明文で述べられていたように、該本は南宋大字本の基礎的な特徴を余さず有している。顔体の字体、欠筆避諱¹⁴などは全ての版本に共通する(写真9)。

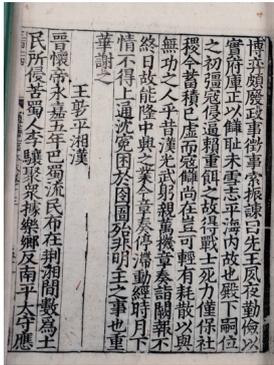


写真9 欠筆避諱の例として、章題の「敦」字

興味深いのは、全ての版本の損壊点が概ね一致することである。特に、第五頁右「穀」字(図版右から2行10字目)の不必要な画が共通していたり(写真10、写真11)、七十六頁前後に見られる底一列が補筆にて補われていたり(写真12)、二十七頁の天一列が界線ごとズレている(写真13)ことなどが代表として挙げられる。

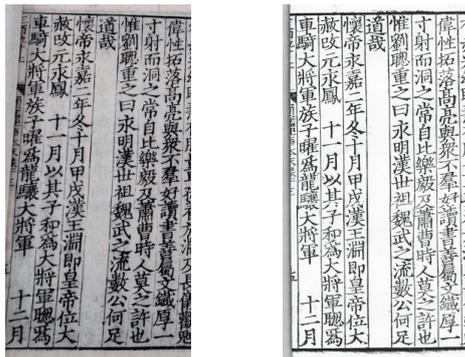


写真10(左)と静嘉堂本写真11(右)

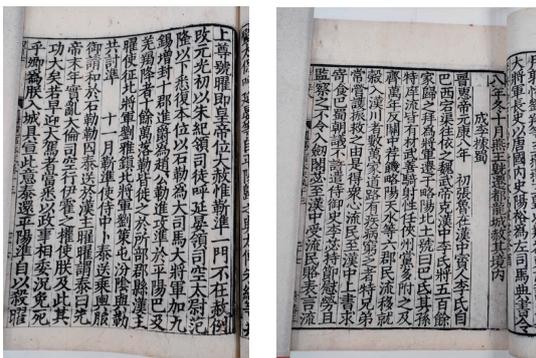


写真12(左)と写真13(右)

また、極端なものとして、十九頁から二十頁の天一列が該書だと欠失し、静嘉堂本だと補筆らしい部分(写真14、写真15)、該書六・七頁では紙ごと継いだ明確な補筆になっている(写真16)部分がある。



写真14(左)と静嘉堂本写真15(右)

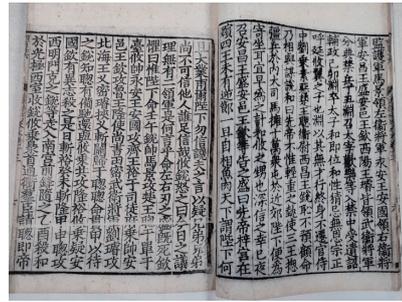


写真16 左右で字体も郭線も違う例

これらが示すのは、版本らはすべて南宋大字本の版木に基づくものの、版木が一部損壊した状態で印刷されていることだ。

また、該書のみの特徴として、明らかな「版の初歩的欠陥」があげられる。七頁左から八頁右にかけて、印刷時にうっかり葉紙を挟んだと思しき長方形の欠失がみられる(写真17)ことや、五十六頁の印刷の乱れ(写真18)、五十七・五十八頁の底一列が紙の折れ(または版木の割れ)でズレて印刷されていること(写真19)などである。

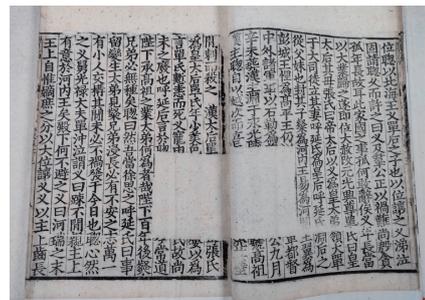


写真17



写真18(左)と写真19(右)

¹⁴ 漢籍において、本朝の皇帝の諱を避けるため意図的に関連漢字の一面を欠くこと。宋版は特に多い。

その他、二頁以降各地に散見される白い塗抹（版木補修のためのもの？）（写真20）や、巻末数頁にみられる空格的墨汚れ（写真21）などが挙げられる。



写真20 (上) と写真21 (下)

ただし、校勘を通じてわかったのは、静嘉堂本は該本に比べ、補筆・補修の箇所が多く、より悪い印刷状態であったことである。字体・墨付が頁全体で変化して、頁全体の補配を疑う部分（写真22 第七十六頁左・七十七頁右）が8頁程度あり、十九頁「分」字の版木を埋めて修補を行った部分（写真23）、前掲写真15の欠けた版木を継いだ補筆、版木八十三頁左から八十四頁右にかけての大規模な手書き補筆（写真24）、さらには補筆を行った文字が誤っている部分（写真25・写真26、例として二十頁右「猜」字）が多数みられるなど、該本に比べもとの「宋版」の状態が損なわれている。

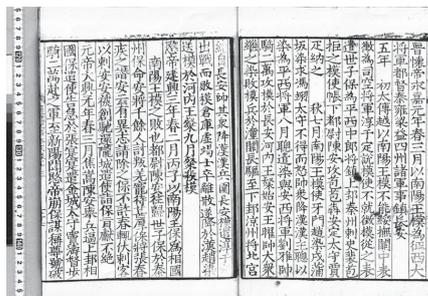
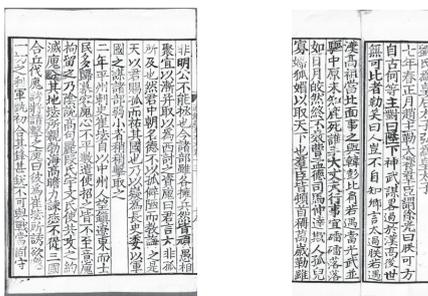
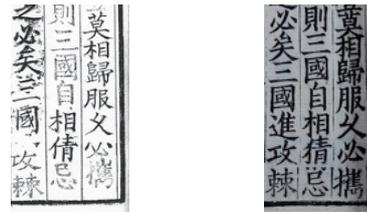


写真22 静嘉堂文庫蔵本



共に静嘉堂本、写真23 (左) と写真24 (右)



静嘉堂本写真25 (左) と写真26 (右)

これらの状況から考えられることは、該本の購入時説明（付録参照）に述べられていた「後印本」の状況、「南宋の版木を清代ぐらいまで再版していた」ということの表れである。即ち、南宋大字本の版木が、長年の使用のもと欠ける・割れる・失われる状況でも補修を施されて印刷刊行を続けていたということであり、該本は静嘉堂本と「同じ版木で」少し前に印刷刊行されたということである。そして、『四部叢刊』本にも同様の特徴があり、さらに修補の痕跡があることを考えると、序録の解説と異なり、やはり同じく明清期修訂本である可能性が高い。

まとめると、該本は南宋宝祐年間刻の明清期修訂・後印本であろう。後印の時期は、静嘉堂本より少し早かったが、欠失などの印刷時ケアレスミスを勘案すると、印刷者の精度はそこまで高くはない本と思われる¹⁵。



写真27 杭州・国家版本館の展示（筆者撮影）

3. 本の履歴：高凌霨とその蔵書印をめぐって

該書の図書館に到るまでの履歴は、ほとんど手がかりがない。唯一の過去を示すものとして、二冊の頭尾に捺された蔵書印がある（前掲写真5～7）。筆者の浅い知識では見当がつかなかったため、大学院時代にお世話になった高橋智先生（慶應義塾大学名誉教授、附属研究所斯道文庫研究員）に伺ってみた。先生が教える子の劉斯倫氏と調査して得られた結果によると、民国期の政治家・高凌霨の蔵書印とのことであった。

高凌霨（1870-1940）、字澤奮、号蒼檜。天津西頭に生まれ、光緒二十年（1894）挙人。清朝にて河北提学使、湖北布政使などを務めた後、民国の初十年にて直隸民政司長、直隸財政司長、交通総長、財政総長、農商総長、内務総長などを歴任した。民国十二年（1923）に黎元洪が直隸派軍閥により大總統辞任を余儀なくされた際、内務総長であった彼は他の総長たちと大總統の職権を臨時代行し、一時その主席となった。まもなく（彼と

¹⁵ 趙興憲が序文にて誇らしげに語っているものの、そもそもの「大字本」があまりよくない印行であった可能性がある。杭州・国家版本館の展示にて目睹した『通鑑紀事本末』南宋本にて巻頭の飾り枠が失敗していたこと（写真27）を見ても、思ったほどの精度にて印刷されていないのではないだろうか。

親交の深かった)直隸派軍人の曹錕がいわゆる「賄選」で大統領に就任した時、彼は國務総代理となったが、選挙腐敗の責任を糾弾され、ほどなく辞任した。その後天津の日本租界に隠居して日本と関係を深め、段祺瑞・王揖唐らと「中日密教研究会」なる政治サークルを結成し、対日協力組織に参加した。日本の侵略期において、1935年に日本の影響下に成立した「冀察政務委員会」委員となり、1937年の天津占領後に「天津治安維持会」委員長、そして日本の任命下の天津市長、河北省長などを務めたが、1938年5月に銃撃を受けて負傷し、翌年に河北省長を辞職して北京(北平)で療養生活に入るも、1940年3月に死去。



高凌霨写真 (Wikipedia, public domain)

以上の略伝に見えるように、彼は日本との関係が深く、該書が彼の生前または死後に日本に流れてきた蓋然性を示すものである。

高凌霨の収蔵した古籍は、その部分を彼の子・高仲綏が台湾に持ち込み、孫の高恭億の代に台湾大学が購入した。国立台湾大学図書館は約1500冊を購入してコレクションを形成し、基礎的な研究を行っている¹⁶。そのため、該書と高凌霨の蔵書の関係について、2025年7月23日-25日に調査に赴き、コレクション内の主要な本について原本・デジタル画像を閲覧した。

その結果、二つの書籍(『水経注』『唐詩類抄』)で同じ蔵書印の存在を確認した(写真28・29・30)。「澤畚鑑賞」印¹⁷と「退園」印は見あたらないが、たった二冊、尾にだけ捺す収蔵者はあまりいないので、全て同じ高凌霨のものと考えられる。



国立台湾大学図書館蔵 写真28(左『水経注』)と写真29(右『唐詩類抄』)「曾蔵章武高氏水渠庵」



国立台湾大学図書館蔵 共に『唐詩類抄』の写真30(左「澤畚長寿」)と写真31(右「澤畚珍藏」)

調査により、高凌霨の蔵書印に対するありようがいくつかわかった。まず、諸本で捺し方・印記が大きく異なることが挙げられる。たくさんの種類・毎冊ごとに捺しているものがあるのに対し、ひとつも捺していないものも存在する。宋版や天禄琳琅(もと乾隆帝の収蔵書)であってもあまり捺していない(写真32・33)のに対し、明版(美本)にはたくさん捺してある。



国立台湾大学図書館蔵 写真32(宋版『西山先生真文忠公文章正宗』)



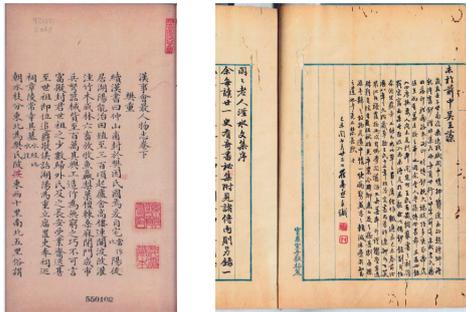
国立台湾大学図書館蔵 写真33(『二程先生集』巻頭下の朱方印を除き全て乾隆帝の印)

前述した『唐詩類抄』は、あまり重複しないように彼の様々な蔵書印を捺しており、いわば彼の(ある年代の)蔵書印一覧のようにになっている。また、彼のコレクションの特徴に、明清時代の抄本を多く含むことがあげられるが、抄本にも捺す・捺さないのばらつきがある(写真34・35)。特にその心情が見えるのは、

¹⁶ 張寶三「臺灣大學所存高凌霨藏中文善本古籍初探」(『王叔岷先生百歲冥誕國際學術研討會論文集』、台北：國立臺灣大學中國文學系、2015)を参照。以降、国立台湾大学図書館蔵本と表記される写真は許諾をうけた同本のデジタル画像複製である。

¹⁷ 別の字体の「澤畚珍藏」印はある(写真31)。

清末の蔵書家である端方の旧蔵書である（写真36・37）。表紙及び扉に書き入れを行い、その来歴と珍重の意思を示している。



國立臺灣大學圖書館蔵の抄本
写真34（左『漢事會最人物志』、2朱方印）と
写真35（右『閑閑老人滄水文集』、書入以外印なし）



國立臺灣大學圖書館蔵『文選尤』
写真36（左 表紙）と写真37（右 端方書後）

これらを考えあわせると、印記の数が彼のその版本に対する愛着を示している可能性が高い。とすれば、頭尾にまめに印をおした、該書もまた比較的彼にとって愛着あるものだったのではないか。

まとめると、高凌霨は宋版残本をどこかで手に入れて、それなりに評価していた。たった二冊で頭尾にまめに蔵書印を捺すあたり、彼の入手時点で二冊のみの残本であった可能性が高い。今回発見できなかった「澤翁鑑賞」印と「退園」印を捺した蔵書を発見し、その入手年代を知ること、該書の高凌霨の入手タイミングを測ることができるだろう。日本と関係の深かった彼の蔵書は日本を経由した可能性がある。その際に放送大学に至る道のりが出来上がったのではないか。

おわりに

以上、放送大学附属図書館の版本とその及ぶ先を巡り、議論を行った。版本への驚きと確認が原動力となったものだが、始めた時の予測に比べ、広い範囲に達す

ることが出来たと思う。

該書はとりあえず、放送大学附属図書館の「宝」と言えるものであり、また宋代からの版本史の貴重なひこまを示すものである。蔵書印や版本来歴にまだ不明点を残すとは言え、それらも含めて今後の検討と成果を期待できるものと言えるだろう。

この該書の存在はいくつかの新たな可能性をもたらすものである。まず、前述したような『通鑑紀事本末』のあまり行われなかった版本史の追究など研究上の貢献可能性である。次に、所蔵者の縁による、国立台湾大学図書館との交流の可能性である。加えて、他の残本・整本との関係を考える版本流伝の可能性もある¹⁸。そして、これまで材料がなかつた、博物館・図書館教育としての版本学古籍学の教育可能性である。貴重書を目撃しながらの教育の効果は実践として不可欠かつ大変有力なものだろう。

該書の調査を行う際に、閲覧調査を許諾いただき、また会場として館長室を快くお貸しいただいた、野崎歆¹⁹・仁科エミの両図書館長、閲覧・写真撮影のご配慮や購入時帳簿の確認をいただいた、磯本善男図書情報課長そして菌部明子課長補佐に感謝申し上げます、本稿の結びとする。

【付録：書籍の購入時説明】

袁樞撰「通鑑紀事本末」卷第十三 1257年（南宋）
宝祐5年刊後印

2冊

「通鑑記事本末」は戦国時代から五代までの中国史を司馬光（1019-1086）が編年体で編さんした「資治通鑑」を、宋の袁樞（1131-1205）が事件別に再編さんしたので、人物や年代ではなく、ある出来事ごとにその顛末を記すその形式は「紀事本末体」と呼ばれ、後の歴史書でも踏襲された。

「通鑑記事本末」には数種の版が知られ、最初のもは孝宗（位 1163-1190）の命で1175年に刊行された版があるが、字が小さく（24字×13行）読みづらかったために、宝祐5年（1257年）により読みやすく彫られた版が印行された。

本書はこの宝祐版にあたり、南宋版の後印であると考えられる。一般的には宋版は初版刊行後、貴重な版本の傷んだ部分を補修しながら清代頃まで再販を繰り返したと考えられている。

卷第十三のみの残巻本ではあるが、明清時代の後刷り頁の差込みや修補のあとはみられず、宋版らしい端正な美しさを備えている装丁は清時代の原本保護を目的とした入紙が施されており、帙も清時代のもの。書物史に重要な位置を占める宋版が市場に出回ることは稀である。

（2025年11月21日受理）

¹⁸ 気にかかっているものとして、『漢字と情報』No.7（京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター、2003）に掲載された櫻井謙介「『通鑑紀事本末』巻第八」宋版本寄託覚書なる文章である。1997年に大阪の古本屋で宋版『通鑑紀事本末』巻八を入手したこと、それを昭和薬科大学に寄贈したことが述べられている。残本一巻分のみという共通性もあり、機会をとらえて調査閲覧を図りたいと思う。

¹⁹ 野崎先生に該書の話をしたところ、先生も放送大学附属図書館にてフローベール『ボヴァリー夫人』挿絵入り初版という「天下の孤本」を発見したエピソードを教えてくださいました（『日本経済新聞』2025年3月30日の文化欄にそのことを述べたコラムあり）。図書館にはまだまだ「宝」が埋もれている可能性がある。